

第二十三章 狂ったシナリオ

福田赳夫蔵相が田中首相の政治姿勢を批判してそのポストを去り、大平が後任として外相から横すべりして大蔵省に初登庁したのは、昭和四十九年（一九七四年）七月十六日のことである。昭和十一年に東京商大卒業直後に入省して以来三十八年ぶり、池田蔵相の秘書官を最後に同省を退官してから二十二年ぶりとなつて、大平は「まさか、この主人公になるとは夢にも思わなかつた」と、感慨深そうに就任の感想をもらした。

新蔵相を迎える経済情勢は、内も外もまったく窮迫した厳しい局面にあつた。石油価格を一挙に四倍にも押しあげた前年秋の石油ショック以後、物価はウナギのぼりに高騰し、四十九年二月の卸売物価上昇率は前年同月比三七％と『狂乱物価』の様相を呈した。物価はその後やや落着きをみせたものの、個人消費の停滞、設備投資の落込み等により景気の後退も進行していた。対外的には、年間三億キロリットルに及ぶ輸入原油の価格高騰のため、外貨は急速に減少した。

大平はその頃のことについて、次のように書いている。

「大蔵省に行つてみると、対外決済の問題が異常な緊張を呼んでいた。大幅に値上した石油その他各種の資源の決済期限は、容赦なく到来し、日夜、その資金手当に忙殺されていた。私は百方手を尽くして、短期

資金の取り入れを行うかたわら、中、長期借款の確保に努めた。そのため一時は、「ジャパン・レート」という不名誉な条件をのまなければならぬ場合もあったが、八月の上旬になって、当面する対外支払難を何とか乗り切るめどがついた。

財政収入の激減による赤字の増大を覚悟せざるをえないという状況のもとで、政府は、物価対策のための総需要抑制基調を堅持しつつ、安定成長路線への移行という、中期的なわが国経済の進路を手さぐりしていった。

大平新蔵相は、就任のさいの記者会見で、「大蔵省は何事によらずチェックし抑制することが多く、大蔵大臣はあまり評判がよくないのが当り前である。総理も各大臣も十分に自重してもらえらると思つてゐる。友情と財政とは別だ」とその心中を披瀝した。この発言は、田中政権の一枚看板であつた日本列島改造論にクギをさしたものと受け取れ、大平がいかに厳しい決意で就任したかを記者たちに印象づけた。

しかし、蔵相就任後のインタビューでは、「田中さんも人間だから、権力主義的ではないか」、「驕慢ではないか」、「自信過剰ではないか」と言われるようなフシが全然ないとは言えないと思つた。だから、十分、政府、党の手順を踏まないで発言することもなかつたとは言えない」と田中批判に一面の妥当性を認めつつも、「しかし、田中さんという人は非凡な人で、その思想と実践、これは相当研究に値する。表面の行動ばかりでなく、その考え方を十分研究する価値のある人だ。（私は）友人として協力も忠告も十分でなかつたと反省している。よかれと思つことはアドバイスし、精一杯努力せにやいかんと思つてゐる」と述べてゐる。これは、三木、福田両実力者が閣外に去り、ピンチにあえぐ田中政権に対し、閣内に残る実力者閣僚として、依然田中政権を全面的に支援していく考えを表明したものであり、政権発足当初に誓ひ合つた「二人三脚で協力し合つていく」という盟友関係は、情勢の変化によつても全く変わらなかつた。

当時の財政当局がかかえていた問題は、要約すると、第一は、総需要抑制政策をいつ緩和するか、第二は、公共料金の抑制をどの程度にすべきか、第三は、物価と賃金の悪循環をどうやって断ち切るべきかということであった。

大平は、大筋は一応、福田前蔵相の敷いた路線を踏襲する方向を示したが、公共料金問題については、「できるかぎり抑制する方向を堅持したいが、むりやり抑えることにより後遺症が残り、かえって経済を損なうことも考えなければなるまい」とし、また、賃金、物価問題をめぐって導入の是非が論議的となっていた所得政策については、「活力ある経済を維持して行く上からみると、所得政策は本来好ましくない」として、基本的には民間の創意工夫と努力を重視し、市場経済「プライスメカニズムに信を置く姿勢を示して、福田の行き方とは微妙なニュアンスの相違を見せた。

蔵相としての大平の本格的な初仕事となったのは、四十九年産米価の問題であった。就任から一週間目の七月二十二日には生産者米価の三七・四％アップが決定された。その大幅アップの背景には、石油ショック後の異常な物価の高騰および四十九年春闘におけるこれに見合う賃金の急激な上昇があった。財政の責任者である大平蔵相は、生産者米価に対応して直ちに消費者米価を引き上げるか、あるいは消費者米価を据置いて財政負担の増大による財政体質の悪化に甘んじるかという、物価と財政の間の厳しい選択を迫られることになった。

さらに、四日後の七月二十六日には、公務員給与の二九・六％アップという人事院勧告が出された。米価問題につづいて、財政負担の一層の増大を迫る要因がのしかかってきた。物価重視の世論やこれを背景とする経済企画庁は、消費者米価の抑え込みを主張したが、大平はあえて大幅な消費者米価引上げに踏み切り、その結果、九月になって三二％の引上げが決定された。

大平はこの頃、「どれを選択しても厄介な仕事なんだ。せめて、レス・ワースということを考えてところだ

るう」ともらしていたが、その心中には、財政の責任者としてこれ以上財政負担を増大したくないという考
えのほかに、経済が苦しい中では、個人も負担すべき点は負担すべきであるという信念があったと思われる。
これについて大平蔵相は、のちに次のように記している。

「かくて日本経済は、中央、地方を通ずる財政赤字の拡大、企業収益の悪化という環境の中で、独り個人
の家計は均衡が保たれ、実質所得が維持され、貯蓄性向も衰えをみせなかった。財政や企業の犠牲で、家計
が維持されているこのような状態は、たしかに健全な姿とはいえず、後に財政の健全化、企業収益の回復等
むずかしい問題を残すことになった」。

ところで一九七四年（昭和四十九年）の夏は、米国も日本も政情は極めて不安定な状況にあった。米国で
はウォーターゲート事件の究明が最終的段階に入り、八月八日にはとうとうニクソン大統領が辞任し、フォ
ード副大統領が昇格する政権交代となった。日本でも夏から秋にかけては、田中首相への党内の「金権体質」
批判が倒閣への色を強めていた。

こうした中で、田中首相は九月十二日、メキシコ、ブラジル、カナダ歴訪の旅に出発したが、めつきりや
つれて帰国した。田中にはのちに「あの旅は失敗だった。三六度を越すところから雪の降るところに飛ぶのだ。
あの気温の差が身体にあたえる影響は、想像を絶するものだった」と語った。

田中首相は、この旅の終わりにバンクーバーで、折からIMF（国際通貨基金）総会出席のためカナダ、
米国を訪れた大平蔵相と落ち合い、ゴルフを楽しんだ。ゴルフの合間にどのような話し合いが行われたかは
明らかでないが、党内運営で窮地に陥っていた田中首相が大平に幹事長就任を打診し、大平が「二カ月前に
大蔵大臣を受けたばかりじゃないか」とこれを断ったという説も伝えられている。

田中首相の帰国後間もない十月九日には、評論家立花隆を中心としたグループの「田中角栄研究 その金

脈と人脈”を特集した雑誌『文芸春秋』十一月号が発売され、田中の資産形成をめぐる疑惑や女性関係を含めた人脈などが暴露された。

これが、心身の消耗が激しい田中首相にとって決定的とも言える打撃となった。田中は大平に「進退も考えている」と心中をもらしたが、大洋州とビルマへの第二次外遊、内閣改造人事、フォード米大統領の訪日などの日程をあげて、いささか迷っているように見えた。こういって田中に対して大平は言葉を強めて言った。

「計画された外遊は公務なのだから、辛くともやりとげなければならぬ。内外ともに暗い状況だが、しかし、いま動揺してはいけない。……キミの外遊中、あらゆる情報をキャッチできるように与野党内にリーダー網を張りめぐらし、山や川を立体的に掌握できるようにしなければならぬ。二階堂官房長官にもそう指示してはどうか……」。

また、大平は政局の状況が厳しいものであることを指摘し、金脈問題については「第一義的にはキミ個人のことなのだから、キミ自身がどう考え、どう措置するのか、道を誤らないようにしなければならぬ」と述べたと言われる。田中金脈問題に対する大平のこうした考え方は終始一貫しており、田中の脱税問題が国会で取り上げられたさい、大蔵大臣として守秘義務の立場を貫きつつも、「第一義的には田中氏個人の問題」という見解を示している。

十月二十二日に外人記者クラブで行われた田中首相の記者会見は、いわば査問委員会的雰囲気での問題の追及に終始して、『田中金脈』は国内問題から一挙に国際的な話題にひろがり、それがまた、一層増幅されて国内にはねかえってきた。

参議院大蔵委員会でも、野党側が田中首相の個人所得と田中の関係する企業の法人所得などをめぐって追及が開始された。党内でも、三木、福田、中曽根三派の若手・中堅議員から構成される『党再建議員連盟』が首相に対して財産の公開などを要求、臨時党大会か両院議員総会かを開いて基本姿勢を明らかにすべきだ

との態度を決めるなど、『田中金権政治』に対する批判がいつせいに噴き上がった。

日頃強気の首相も、政権をこのまま維持すべきかどうかの、深刻な選択を行わなければならぬ窮地に追い込まれた。十月二十八日に始まる豪州、ニュージールランド訪問の日程を前にして、田中は自らの進退と政局の行く末について肚を固めるため、二十四日から二十六日まで実力者との会談を持った。このうち二十四日の田中・大平会談では、田中が大平に、後継首班を引き受ける意思があるかないか、その意中を質したという。田中はのちに、「大平君にその気があるのなら、自分は全力を上げて大平政権の実現に努力しなければならぬ」と考えた」と言っている。しかし、大平は、このとき、はっきりした意思表示をしなかった。そもそも大平にとって田中政権は、その発足のとき宏池会の同志に、この内閣への協力を求めた言葉に見られたように、半ばは自らの政権であり、したがって四方八方から襲いかかる田中批判の嵐は、自らに対しても向けられていると感じていた。そういう自分が後継となっても、果たして政局を乗り切ることができるか。三木・福田らの反発は明らかだし、中曽根も微妙な動きをしている。しかも出来上がった政権は『田中亜流政権』として世論の批判を真っ向から受けるであろう。大平の心中には、こういう考えがめぐっていたにちがいない。

会談後、大平は記者たちの金脈問題に関する質問に答えて、「田中は保身のこととは考えていない。これは、第一義的には田中個人の問題だが、自民党総裁として自民党の問題であり、内閣の問題でもある。したがって最終的には田中自身が判断すべきことである」と述べ、さらにこの問題に対する大平自身の考え方については、「私としては、友人として苦しみを分かち合おうということだ。この問題にどう対処するかは結論は出ていない。每晚考えているところだ。田中が（第二次外遊から）帰ったら、私の考えを話すつもりだ」とその心中を披瀝した。

翌二十五日に行われた田中・河野（参議院議長）会談のあとの記者会見で、河野が「田中は『政権に恋々

とはしない」と述べたことを明らかにし、「ともかく（政局收拾には）『二つの道』がある。来月末には大波瀾があるだろう」という感想を述べたため、翌朝の各紙はいっせいに「首相進退を考慮」と報じ、田中の進退問題は一挙に公然化した。

その二十六日早朝、田中は椎名副総裁を密かに目白の私邸に招いて会談し、椎名に暫定政権担当の意思があるか否かを打診した。椎名は健康上の理由などから即答を避け、首相が外遊から帰国した後に再協議することとした。

先の河野発言にあるように、田中の心中には、このとき『二つの道』があつたであろう。一つは、二十四日に大平に意見を求めたように、盟友大平を後継総裁に指名し、大角体制を維持したまま政局を切りぬける道である。問題は大平の意思次第ということになる。もう一つの道は、椎名に打診した椎名暫定政権で局面の転回を図る道である。段取りとしては、田中が第二次外遊から帰国したのち内閣改造を行い椎名副総裁を副総理格で入閣させ、間もなく自らは身を引いて椎名が田中の総裁としての残りの任期を総理・総裁として預かる」というものであつた。

大平も椎名も、田中が、外遊から帰って再度話し合うこととしたので、結論は棚上げされ、十日余りの考慮期間が置かれることとなつた。

しかし、椎名にとつて、預けられた問題はあまりにも重すぎた。病身でもある椎名は肚を割って話し合える仲間と相談することとなり、そのため、椎名暫定政権構想は、首相の外遊中に政界の奥深いところから漏れはじめ、独り歩きを始めた。

この間に、田中からストレートに大平へというもう一つの道も形を整えつつあつた。党の三役を田中、大平の強力ラインで固め、強気で中央突破し、行けるだけ行って、いよいよの時には大平にパトタッチする

という方針が田中派と大平派幹部の間で固められた。

田中首相は十月二十八日に外遊に出発したが、田中派幹部は、この間に首相退陣説をエスカレートさせたため、田中、大平、中曽根の主流三派および中間派との会合を重ね、結束を強める努力を行った。一方、福田赳夫は、首相出発当日、高知市での記者会見で、「政局は急転回しており、参議院選挙後に自分がとなえてきた自民党の出直しの改革の情勢が出てきた」と自ら政権担当の用意があることを示唆した。

十一月八日、田中首相が第二次外遊を終えて帰国した。翌九日の田中との会談で、椎名は、自分は病身のため、首相となればその職に専念せざるをえない、折角、派閥解消など党改革に意欲を燃やしているところなのに、党の体制が大派閥の代表によって占められたのでは、党主導の政権運営ができなくなる、そこで自分と政治理念が近い三役人事が行われるなら、暫定政権を引き受けることができる、と述べ、三役に関する椎名案を具体的に提示したと言われる。

同じ十一月九日、大平蔵相は、橋本幹事長の要請で、水戸へ講演に出かけていたが、田中・椎名の動向を知って、水戸から急遽帰京して、その足で田中邸を訪れ、約一時間半にわたる会談を行った。大平は、大派閥を除外して党運営をはかるといふ椎名の考え方は現実的ではなく、いたずらに党の混乱を深める結果となるという考えを田中に伝えた。

二つの構想の選択を迫られていた田中首相は十一月十一日、大角体制堅持の第二次田中第二次改造内閣を発足させた。

注目された党三役には、幹事長に二階堂進（田中派）、総務会長に鈴木善幸（大平派留任）、政調会長に山中貞則（中曽根派）が決まって、椎名が望んだ人事はまったく受け入れられていないことがはっきりした。三木武夫は、「この改造が国民の目には田中内閣の延命工作と映っている」と批判し、福田赳夫とともに閣僚候補の推薦を拒否した。入閣を要請された保利氏もこれを断った。もちろん、椎名副総裁の副総理格での入

閣も実現しなかった。大平蔵相、木村外相、中曽根通産相等は留任した。憤懣やる方ない椎名は、「好きなようにやればいい」と言いのかして私邸に引き揚げた。椎名暫定構想には、中間小派閥あるいは無派閥の長老たちの思惑がからんでいただけに、これらの人々は、大平が椎名構想をつぶしたと見て、大平への反感を強めた。

こうしたことから改造人事を強行したものの、もはや田中政権の前途に展望が開けることは期待できなかった。自民党内では「田中以後」を模索するさまざまな動きが出ていたが、大平は、フォード大統領来日の十八日午前に関われた閣議のあと、首相に会い、「いまはフォード歓迎一本に全力を注ぐべきだ。フォードがわが法域内にいる間は、外交儀礼上からも退陣表明はすべきでない」と説くとともに、フォード休戦による事態の鎮静化を狙ったが、大統領離日を待たず、政局は後継工作に向けて動き出し、田中政権の命運が尽きることは明らかになった。フォード訪日の公式日程は十一月二十日で終了し、二十一日付各紙朝刊は一斉に「田中首相、退陣を決意」と報じた。

党内は待ちかねたように火を噴き始めた。先制攻撃を仕掛けたのは大平擁立路線であり、二十一日、鈴木総務会長は、「後継総裁は公選で選ぶべきである」とまず方法論を打ち上げた。公選になれば暫定政権構想がけし飛ぶことは明らかであり、数の上から大平が勝てるという読みがある。

これに対し、翌二十二日には椎名・保利会談が持たれたが、「暫定」で行くとの意見の一致が見られたとされる。この頃から、「暫定」も椎名だけではなく、前尾暫定、保利暫定など、いろいろな構想が虚実取りまぜて噂され、田中首相の正式退陣表明前に、政局はポスト田中にむけて動きだしてしまっていた。

十一月二十六日の閣議では、大平蔵相から、米価、給与など追加財政需要の後始末という性格の昭和四十九年度補正予算の概要が報告され、これが了承を得たのち竹下官房長官が田中首相の退陣声明を発表した。

「政権を担当して以来、二年四力月余、私は決断と実行を胆に銘じ……」から始まり、「わが国の前途に想

いをめぐらすとき、私は一夜、沛然として大地を打つ豪雨に心耳を澄ます思いであります」に終わる。『私の決意』は名文であったが、自民党内にとっては、これは『田中以降』の政変劇の開幕を告げる合図であった。

田中首相が退陣を表明した直後から、自民党内は大きくゆれ、次の有力な総裁候補と目される福田赳夫、大平正芳、三木武夫の三陣営の間で活発なハラのさぐり合いが始まった。三陣営の基本的な立場は、公選によつて後継総裁を決めるべしとする大平派と、話し合いによつて選任すべしとする福田、三木派とに分かれた。党内の力関係からすれば、四十七年の『ポスト佐藤』を争ったさいの二位である福田と、三位ではあるが田中陣営の支援が得られることは間違いない大平の争いであり、それぞれが自らに有利な後継総裁選出の方法を主張するものと見られた。

大平派最高幹部の一人である鈴木は、いち早く十二月十日に公選を行うための党大会を招集したい、という意向を表明した。公選になれば歩が悪いと諷んだ福田、三木両派は鈴木発言に猛反発して、あくまで話し合いによる総裁選出を主張し、もし、総裁公選が実施されるなら、党大会をポイコットすることも辞さない、と強気の構えをみせた。

対立は日ましに激しくなるばかりだったが、舞台裏では極秘裡に、福田、大平、三木の三候補の間の接触がはかられていた。働きかけは、主として福田、三木サイドから行われ、十一月二十七日早朝、世田谷区松原の永野重雄日商会頭邸で大福会談が実現した。この会談では福田が話し合いによる選出を主張し、永野も「長幼の序で、福田氏をまず推して」と助言したが、大平は「やはり公選で行きたい。姿勢を正した選挙での決定が最も公正明朗だと思つ」と答え、話し合いは物別れに終わった。

翌二十八日早朝、こんどは渋谷区南平台の三木邸の隣にある三木の女婿の家で大平・三木会談が行われた。この会談も福田との会談と同様、公選論と話し合い選出論の平行線だったが、会談の終わり頃に三木が新党結成構想をほのめかし、大平はいささか驚いた。

大平派對福田・三木兩派の対立が、抜きさしならない泥沼の様相を呈しはじめたので、その二十八日の午後には椎名副総裁は調整役として動き出した。船田中元衆議院議長らのキモ煎りで開かれた党顧問会議には四十九人の顧問が出席した。大平派の福永健司と田中派の久野忠治が公選論を主張したものの、大勢は話し合い論に傾いた。椎名副総裁はこれを背景として、ひとまず総裁候補と目されている福田、大平、三木および中曾根康弘、そして自分を加えた五者協議を行い、その場で方向を出すこととした。

翌二十九日、椎名副総裁は四実力者を党本部に招いて個別に会談した。三木、福田の両者はかねての主張通り話し合い選出を唱え、中曾根は「四人にこだわらず全党的に選んではどうか」と暗に「椎名暫定」をも検討の対象とするようほめかした。焦点は四人の中でただ一人、公選論を主張している大平との会談である。

大平が椎名副総裁の基本的な考え方をただしたのに対し、椎名は「いまは重大な局面なので、まずこれを乗り切らなくてはならない。来年の夏頃までに、とりあえずつなぎの政権をつくり、その間に党の体調を整えて、その後で本格的な政権をつくったらよいのではないか」と答えた。そこで大平が「そういうことであるならば、副総裁という立場上、椎名さんということも考えられるが」と言うと、椎名は「身体が弱いので、こつちからやるつという気はないが、みんなからせひにと言われれば、逃げるわけにもいくまい」と「椎名暫定」の可能性を否定しなかった。話し合い選出と政治空白につながる暫定政権論に反対する大平は、「重大な局面だからこそ、半年もの間経過的な政権をつくるのは適当ではない。賛成できない」と述べ、会談は終わったという。

会談のあと記者会見した大平は、椎名副総裁との会談で暫定政権に反対したことを明らかにするとともに、「話し合いという『妖怪』がうろつろつしている」と述べ、さらに「椎名さんもやる気があるようだ」とつけ加えた。大平の会見内容は、「土俵に上がってみたら行司がまわしを締めていた」という言葉となって永田町に流布された。このため椎名は、調整役として行動しながら最後に主役となるといつ手を封じられ、調整役に徹

するか暫定政権の候補者として行動するかの選択を迫られた。結局、彼は「暫定」の意思を捨て、調整役として動くハラを固めたが、大平が「椎名暫定」を打診し、事実上これをつぶしたことは不快感を示し、「大平はひっかけたつもりだろうな」ともらしていたという。椎名にすれば、先の改造人事で大平の巻返しにあつて自分の構想をつぶされたのにつづいて、今度も「暫定」の目をつぶされたとあつて、大平への愉快ならざる感情を一段と深めた。

椎名副総裁と四実力者との会談は、三十日の午前十時から行われた。この席ではまず、「ここで後継者が誰に決まっても、その人物に対して異議なく協力して、挙党一致体制をつくっていく」ことを申し合わせたのち、「党の再出発と挙党体制の確立、インフレ克服と経済安定、社会的公正の確保の三点を新総裁は実行すること」が約された。挙党体制の確立については、全党的人事を党・内閣について行う。とくに幹事長、財務委員長、経理局長は、原則として総裁派から出さない、人事は党員の貢献度をはかり、党員の励みになることを考える、総務会の構成と運用の現状を再検討し、改革を行う、政策の調査立法機能を強化する、党の外部組織を強化する などが謳われた。

四時間半にわたる会談の終わりに、椎名副総裁は「時局がら、あすの日曜日もし足勞願いたい」と述べた。その夜、政界ではさまざまな噂が流れた。

遅くなって、椎名の周辺からまず中曽根のもとに、裁定が三木に向かっていることが暗に伝えられ、三木、福田にも伝わった。しかし大平にだけは確な情報が入れられず、ただ、椎名が翌十二月一日に具体的な固有名詞を出すかもしれない、もしかすると、三木であるかもしれない、という程度の話が流れてきた。大平はそれに対して、「かりに三木の名前が出て、それはつぶれるよ」と語った。大平としては、もし椎名が福田を推すのならば論外であつて、これは正面から拒否する。もし福田以外の名前が出た場合には、福田が「ウン」と言はずがない、したがって、調整はまとまらず、公選に行くことは必至だと読んでいた。また、

大平は、党総裁としての田中の発言力はまだ極めて大きく、椎名も含めて五者は、この五者会談に出席していない田中の意向を無視できまいと考えていたフシがある。

宏池会では公選必至と考えて、全員が多数派工作に散り、幹部は票読みに集中した。

十二月一日午前十時半に続開された五者会談の冒頭、椎名はいきなり裁定を示した。彼は「選挙方法で完全な合意をみざることには遺憾だが、これまでの調整の経過にかんがみ、話し合いによつて、円満に新総裁を選出すべし」という要望が、党論の大勢であると判断する」と述べ、新総裁については、「清廉なることはもちろん、党の体質改善、近代化に情熱をもつて取り組む人でなければならぬ」として、「このさい、政界の長老である三木武夫氏をもつとも適任であると確信し、推挙する」と、裁定を下した。

この裁定が下つた瞬間、三木は「青天の霹靂だ」と声をあげた。このあとすぐ三木と他の三実力者との個別の会談が行われた。三木・中曾根会談の間、大平、福田の二人だけが別室に残つたさいに、大平が「これは、どうということなのか」と福田に聞くと、福田は「やむをえんぞ、大平君。ケンカに勝つても勝負に負ける」と感じたといい、椎名が福田以外の固有名詞を示した場合、福田が吞むはずがないと思つた大平の観測は、全くの思い込みに終わった。

個別会談が済んだあと、三木は手回しよく椎名裁定を受諾する一文を読み上げたが、大平は、終始儼然たる表情で、「裁定の扱いは少し考えさせていただきたい。夕方まで待つてもらいたい」と述べた。

大平は、そのあと、田中に事の成行きと政局の収め方を話し合うべく、目白台を訪れた。田中はこの日に椎名の裁定が出るなど全く考えていなかったため、朝から埼玉県にゴルフに出かけていたが、事態を知つて急速帰路についた。大平は田中の帰宅を待つ間、さまざまに思いをめぐらした。椎名裁定を聞いた直後には、これまで大平によかれと心を砕いてくれた盟友である田中に、まず意見を聞きたいという気持ちがあつたで

あろう。また総裁の意向を確認せずに副総裁が裁定してよいのか、という手続き論についても疑問があったであろう。しかし、時間がたつうちに次第に大平の心は落ち着いてきた。裁定を拒否した場合、相手方が新党に走るか、大平サイドが孤立するか、いずれにしても混乱は避けられまい。それに暮も迫って、補正予算案をはじめ政府として取り組まなければならない課題が山積している。田中が椎名裁定を強く拒否すればともかく、そうでなければ裁定は呑まざるをえまい。大平の心中にはもはや、それはそれで一つの選択である」と、事態を客観的に見るゆとりができていた。

田中が帰宅して行われた会談では、田中が「これはしょうがないと思う。うまくやられた。五十一対四十九でキミの負けだ」と語り、大平も最終的に受諾のハラを固めた。

すでに述べたように昭和三十九年秋、池田首相が病気で退陣の表明をしたさい、佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎の三人が後継総裁候補の名乗りをあげた。川島副総裁らが調整工作を行ったが、三者とも強気の構えを崩さなかつたため、調整は一本化できず、結局、池田首相の指名で佐藤に決まり、決着がついたという経緯がある。大平は当初、田中首相が退陣を表明したあと、四人の候補が名乗りをあげた今度の場合もこの十年前のケースと同様だと考えていた。前と同じく副総裁が調整工作を行ってなおかつ一本化できなければ、総裁の裁断にまたざるをえないと考えていたのである。大平が見落としていたのは、党則の中の「副総裁」の規定に、「副総裁は総裁を補佐し、総裁に事故あるとき、又総裁の欠けたるときは、総裁の職務を行う」という文言の圏点の部分である。椎名の解釈は、田中は「事故」の状態にあり、椎名は、すでに総裁を代行しているというものであった。

大平を除く三木、福田、中曽根が椎名裁定を呑み、田中首相も事実上了承したことは、この三者が椎名の解釈を受け入れていたことを意味する。そうだとすれば、あとは大平派がどのような形で「終戦処理」を行

うかだけである。大平派は、総務会に「今日の措置は百策尽きて万やむをえないものであって、これをもって先例としない。今後、総裁選出は、いかなる場合にも党大会の公選によるのみ行うべきである」という申合せを提案することになった。提案が総務会の満場一致の諒承を得たという浦野幸男副幹事長からの報告を聞いたあと、大平は、宏池会の議員の労を謝して、「同志の諸君にご心配をいただきながら、不徳のいたすところで、ご期待に応えない結果となった」と述べた。こうして大平は、目前に見た政権の座から一步後退を余儀なくされたのである。

すでに見たように、自民党は、戦前に根を持つ自由党と日本民主党が昭和三十年の保守合同によって一本化したものである。この二大潮流は、その後、事に触れ時に応じて、陰に陽に党内でその力を競ってきた。それは、激烈な派閥抗争の姿をとることもあったが、一方で、「党内の政権交代」を促して、党を活性化することに役立ってもきた。歴代自民党政権の性格を見ると、初代総裁鳩山は自由党系の出身だが、民主党系の力で政権を実現した。自由党系の二代総裁石橋湛山のとを受けて三代総裁となった戦前官僚の岸信介は日本民主党の幹事長として腕を振るった。四代総裁池田勇人は、自由党吉田茂の秘蔵っ子であった。池田のライバルであった五代総裁佐藤栄作は池田と同じく吉田の門下生であったが、岸信介を兄としていたこともあって、自由党系と民主党系の二つの流れを体していた人物だった。佐藤政権が長命であった理由の一つは、対立する両勢力を二つながら抱えていたことにもあった。この佐藤の下に、民主党出身だが、すぐに吉田系自由党に転じた田中角栄と、民主党系の福田赳夫がいた。この二人は、佐藤派内でライバルとなり、佐藤政権後の総裁公選で激しく争った。田中は、池田勇人の弟子筋となる大平正芳と手を組んで、六代総裁となり、自由党系の政権をつくった。結果として福田は、民主党系の、三木武夫と近づき、さらに同系の中曽根とも手を結ぶようになって、反田中・反大平路線を強めた。

こうした経緯を振り返ってみると、椎名裁定による三木政権の出現は、自由党系から民主党系への政権交代であったと言える。しかし、三木の場合、民主党とはいえ、戦前昭和十二年から国会に議席を持ち、戦後は、日本協同党、協同民主党、国民協同党などの中堅小政党の形成に参加したのち、民主党の前身である国民民主党に属したという履歴を持っている。このため派閥の勢力も少なく、党内に強い支持基盤がなかった。ある意味では、それが、大派閥主導を嫌う椎名が三木を総裁に選んだ理由であった。しかし、それは半面からすれば、三木が野党やマスコミに傾斜する理由であった。のみならず、三木と他の党実力者との間には、三木政権の位置づけについて大きなずれがあった。三木は、自分が椎名裁定で自民党の救済者として選ばれたと考えたのに対して、党内多数は三木政権を緊急避難的な暫定内閣だと考えた。ここに三木内閣が生まれた時から胚胎した悲劇の根があったのである。